世界文学ライブラリー 講談社

人形の家 ヘッダ・ガブラー

イプセン／毛利三彌訳

Henrik Ibsen ／ Et dukkehjem, Hedda Gabler

人形の家
ヘッダ・ガブラー

Henrik Ibsen
Et dukkehjem, Hedda Gabler

イプセン／毛利三彌訳

Henrik Ibsen

世界文学ライブラリー　講談社

世界文学ライブラリー——12
人形の家／ヘッダ・ガブラー　イプセン
1971年8月20日第1刷発行

定価　340円
訳者　毛利三彌　成城大学助教授
発行者　野間省一
発行所　株式会社講談社　東京都文京区音羽2-12-21
郵便番号　112
電話　東京（945）1111（大代表）
振替　東京 3930
印刷所　大日本印刷株式会社
製本所　株式会社堅省堂

© KODANSHA 1971　Printed in Japan

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

0397-250124-2253（0）（文三）

目次

人形の家……毛利三彌訳 3
ヘッダ・ガブラー……毛利三彌訳 75
解説……毛利三彌 155
イプセン輸入時代……藤木宏幸 174
主要作品解題……毛利三彌 177
年譜……毛利三彌 182

装幀＝横山明／依岡昭三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

人形の家

登場人物

上級弁護士　ヘルメル
ノーラ（ヘルメルの妻）
ドクトル・ランク
リンデ夫人
弁護士　クロクスタ
ヘルメルの三人の子供
アンネ・マリーエ（乳母）
女中
使いの者

物語はヘルメルの家で進行する

第一幕

気持よく、趣味ゆたかに、しかし贅沢でなく飾りつけられた居間。

舞台奥、上手のドアは玄関口へ、下手のドアはヘルメルの書斎に通じる。中間にピアノ。下手壁の真中にドア、遙か前方に窓がある。窓の側にまるいテーブルと二、三の肘かけ椅子、小さなソファがある。

上手壁のやや奥にドア、同じ側の前方に暖炉があり、その前に肘かけ椅子二脚と揺り椅子が一脚。

暖炉とドアの間に小さなテーブルがある。壁には銅版画、焼き物その他の小さな美術品のおいてある棚。豪華本の並んだ小さな本棚。床には敷物がしいてある。暖炉には火が燃えている。冬の日。

外の玄関口で呼び鈴が鳴る。ややあって、戸の開かれる音。

ノーラが楽しげにハミングしながら入ってくる。

彼女は外套を着たまま沢山の包みをかかえており、それらを上手のテーブルにおく。彼女が入ったあとの玄関口へのドアは開いたままなので、クリスマスツリーとかごを持った使いの者が見える。彼はそれらを、戸をあけた女中に渡す。

ノーラ　そのクリスマスツリーをうまく隠しておいて、ヘレーネ。子供達に見つけられちゃ駄目よ。今晩飾りつけをするんだから、（使いの者に財布を出しながら）おいくら――？

使　い　五十エーレです。

ノーラ　はい、一クローネ。おつりはいいの。

使いの者は礼を言って去る。ノーラは戸を閉める。満足そうにくすくす笑いをしながら外套を脱ぐ。

ノーラ　（ポケットからマカロンの包みを取り出し、一つ、二つ食べる。それから、忍び足で夫の部屋のドアに近づき聞き耳を立てる）うん、居る居る。

にっこりして下手のテーブルの所へ行く。

ヘルメル　（自分の部屋から）そこで囀っているのは、うちの雲雀（ひばり）かい？

ノーラ　（包みを開きながら）そうよ。

ヘルメル　そこで跳ねまわっているのは、うちの栗鼠（りす）かい？

ノーラ　そう？

ヘルメル　栗鼠はいつ戻ったんだ？

ノーラ　たった今。（マカロンの包みをポケットにしまい、口をぬぐって）トルヴァル、あたし、何を買ってきたか見たくない？

ヘルメル　邪魔しないでくれー　（すぐあとにドアをあけて顔を出す。手にペンを握っている）買物？　それみんなかい？　うちのかわいい金くい鳥は、また、どっさり使い果してきたな？

ノーラ　だって、トルヴァル、今年はちょっとぐらい自由にさせてよ。けちけちしなくてもいいクリスマスなんて初めてだもの。

ヘルメル　いいや、無駄使いは出来ないぞ。

ノーラ　いいわよ。トルヴァル、少しぐらい。ね？　ほんのちょっぴりなんだから。今は、大した職についたんでしょう。これからは、沢山のお金が入るんでしょう。

ヘルメル　新年からはな。だけど給料が入るまでには、まるまる三ヵ月はある。

ノーラ　そんなの。借りればいいわ。

ヘルメル　ノーラ！　（近寄って冗談に耳をつかむ）またお前の無分別が始まった。若し俺が今日千クローネ借りて来て、お前がクリスマスに全部使い果して、それで大晦日の晩に俺の頭に屋根瓦が落ちて、俺が死んじゃったら——

ノーラ　（彼の口に手をあてて）やめて、そんないやな。

ヘルメル　しかし万一そうなったら——どうする？

ノーラ　そんな恐ろしいことになったら借金なんかあろうとなかろうとおんなじだわ。

ヘルメル　だけど、金を貸したほうは？

ノーラ　貸したほう？　そんな人、どうでもいいわ。どうせ知らない人達でしょ。

ヘルメル　ノーラ、ノーラ、汝はこれ女なりー　いや真面目な話、ノーラ、俺の考えはわかっているだろう。借金はしないー　金は借りないー　借金している家庭は、どこか潑剌さに欠ける。従って何か不潔なものがしみ込んでくる。今日まで二人で頑張って来たんだ。もうしばらくの辛抱だよ。

ノーラ　（暖炉の方へ行く）ええ、ええ、お好きなように、トルヴァル。

ヘルメル　（ついて来て）さあ、さあ、かわいい雲雀が羽をすぼめちまっちゃいけない。うん？　この栗鼠はふくれっ面をしているぞ。（財布をとり出して）ノーラ、ここに何を持っていると思う？

ノーラ　（すばやく振り向き）お金ー

ヘルメル　そうら。（いくらかの札を彼女に差し出す）俺だって、クリスマスに金がいることぐらい知っているよ。

ノーラ　（数える）十——二十——三十——四十。まあ、ありがとう、ありがとう、ありがとう、トルヴァル。これだけあれば当分やってゆけるわ。

ヘルメル　本当だぞ。
ノーラ　ええ、ええ、大丈夫。それよりここへ来ない？　あたしが買ったものを見せてあげる。とても安いのー　ほら、これはイヴァールの新しいシャツ――それにサーベル。ボッブには馬とラッパ。それからこれはエンミーの人形と寝台。簡単なものだけど、どうせあの子はすぐにバラバラにしちゃうでしょ。それから女中達には洋服地とハンケチを買ったわ。ばあやにはもっとあげたほうがいいんだけど。
ヘルメル　この包みは？
ノーラ　（叫ぶ）駄目、トルヴァル、今晩まで駄目！
ヘルメル　まあ、いいさ、だけど、無駄使い屋さん、お前、自分には何を買ったんだい？
ノーラ　へん。あたしのもの？　そんなの、どうでもいいわ。
ヘルメル　いや、よくないよ。さ、何かあまり高くないもので、お前が一番ほしいと思うものを言ってごらん。
ノーラ　あたし、わからないわ。ああ、そうだ、トルヴァル――
ヘルメル　うん？
ノーラ　（彼のボタンをいじって、彼の顔を見ずに）若し何か下さるんなら、それじゃね――それじゃね――
ヘルメル　さあ、さあ、何だい。
ノーラ　（急いで）お金を頂戴。ね？　いいと思うだけでいいわ。あたし、自分で何か買う。
ヘルメル　しかし、ノーラ――
ノーラ　そう、そうしてよ、ねえ、トルヴァル。お願い。そうしたら、そのお金をきれいな金紙（きんし）に包んでクリスマスツリーにさげるわ。面白いと思わない？
ヘルメル　無駄使いばかりしている鳥を何ていうんだっけな？
ノーラ　ええ、ええ、金くい鳥。わかっているわ。でも言う通りにして、トルヴァル。そうすれば、何を買ったら一番いいか考える暇もできるし、理窟に合うでしょ？　どう？
ヘルメル　（にやにやして）全くだ。つまり、俺がやる金をほんとにとっておいて、間違いなくお前のために使うならね。ところがその金は結局ロクでもない家のことに使われてしまう。そして俺はまた金をせびられる。
ノーラ　でも、トルヴァル――
ヘルメル　違うと言えるかい。俺のかわいい、かわいいノーラ。（彼女の腰に手をまわし）この金くい鳥はかわいらしいが、途方もなく沢山のお金を喰うんだなあ。たかが一羽の小鳥がこんなに高くつくなんて全く信じられんよ。
ノーラ　まあ、どうしてそんなこと言えるの？　あたしは出来る限り倹約しているのよ。
ヘルメル　（笑う）その通り、出来る限りね。しかし、お

前にはこれっぽっちも出来ないんだ。
ノーラ　（鼻を鳴らし、満足そうに声を立てずに笑う）ふん。あたし達、雲雀や栗鼠というものは、どれだけ物入りが多いかわかってもらえたらね、トルヴァル。
ヘルメル　おかしな奴だな。お父さんそっくりだ。あらゆる手段を講じて金をせしめようとする。ところが、手にした途端、指の間からみんなこぼれ落ちちゃうんだ。どこへ行ったか自分でもわからない。まあ、仕方がないさ。血筋なんだから。そうだよ、そうだよ。遺伝なんだ、ノーラ。
ノーラ　ああ、パパからもらいたかった性質は沢山あるわ。
ヘルメル　しかし俺は、今のままのお前が一番いいんだよ、かわいい歌うたいさん。まてよ、どうしたんだ、お前の顔は――なんていうかな――どうも変だぞ――
ノーラ　あたしの顔？
ヘルメル　うん、変だ。俺の眼をじっと見てみろ。
ノーラ　（彼を見つめる）どうお？
ヘルメル　（指でおどかして）このお菓子好きは今日町で大変忙しい思いをしなかったか？
ノーラ　いいえ。どうしてそんなこと。
ヘルメル　この子は、本当にお菓子屋さんへ寄り道しなかったか？
ノーラ　とんでもないわ、トルヴァル。
ヘルメル　ジャムをちょいと口に入れてみなかった？
ノーラ　全然。
ヘルメル　マカロンの一つか二つ味見するのは？
ノーラ　いいえ、トルヴァル、断言するわ、本当に――
ヘルメル　まあ、まあ、まあ、冗談さ――
ノーラ　（上手のテーブルのほうへ行く）あなたの言いつけを破るなんて思いもよらないわ。
ヘルメル　わかってるよ。はっきり誓ったんだからな――。（彼女に近づく）さあ、クリスマスプレゼントを隠しておけよ、今晩クリスマスツリーに明りがついたら出してくるんだろう。
ノーラ　あなた、ランク先生をお招きするのを忘れなかった？
ヘルメル　忘れた。でも必要ないさ。言わなくったってこで食事をするよ。しかし、ま、朝のうちにやって来たら招待はしとく。うまいブドウ酒を注文しておいたんだ。ノーラ、俺がどんなに今晩のことを楽しみにしているか、想像もつくまい。
ノーラ　あたしだって。それに子供達も大喜びよ、トルヴァル！
ヘルメル　うん。いい気持だ、しっかり保証された職業を持ったというのはな。それに収入が多いんだ。どうだい、嬉しくないか？
ノーラ　ああ、素晴らしいわ！　奇蹟だわ！

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ヘルメル　去年のクリスマスを憶えているかい？　三週間もの間、お前は晩になると部屋に閉じこもったものだ。俺達を驚ろかすんだといって、一人でクリスマスツリーの飾りの花を作ってたな。あんな退屈な思いをしたことは一度もないよ。

ノーラ　あたしは少しも退屈しなかったわ。

ヘルメル　（微笑んで）だけど、出来上りは貧弱だったぞ、ノーラ。

ノーラ　まあ、またそれを言い出してあたしをからかうのね。猫が入って来て目茶苦茶に引き裂いちゃったんだもの、どうしようもなかったわ。

ヘルメル　そう、どうしようもなかった、かわいそうに。お前は俺達みんなを喜ばせようと一生懸命だった、それが肝腎なことだよ。それにしても、貧乏時代が済んだのはいい。

ノーラ　ええ、本当に素晴らしいわ。

ヘルメル　もう俺は一人で退屈している必要はない。お前は大切な眼や細っそりしたきれいな手をいためる必要もない——

ノーラ　（手をたたいて）ええ、そうね、トルヴァル、そんな必要はもうないのね！　ああ、なんて素晴らしい。なんて、いい気持なんでしょう！（彼の腕をとる）じゃあ、これから、どんな生活をしたらいいか、あたしの考えを言うわ。クリスマスが終ったらすぐにね——。（玄関で呼び鈴が鳴る）あら、呼び鈴よ。（しばし、部屋の中で耳を立てる）誰れか来たんだわ。いやあね。

ヘルメル　訪問客なら、俺は留守だからな。忘れるなよ。

女　中　（入口のドアで）奥さま、見知らぬ御婦人ですが——

ノーラ　お通しして。

女　中　（ヘルメルに）それから、お医者さまもいらっしゃいました。

ヘルメル　俺の部屋へお通ししたのかい？

女　中　はい、そちらへ行かれました。

ヘルメルは自分の部屋へ行く。女中がリンデ夫人を部屋に案内し、あとからドアをしめる。彼女は旅装。

リンデ夫人　（おずおず、やや、ためらって）今日は、ノーラ。

ノーラ　（確信なく）今日は——

リンデ夫人　あなた、わたくしを憶い出さないのね。

ノーラ　ええ、あたし——そう、何だか——（突然とび出して）まあ！　クリスティーネ！　本当にあなたなの？

リンデ夫人　ええ、わたくしよ。

ノーラ　クリスティーネ！　あなたがわからないなんて！　どうして憶い出せなかったのかしら——。（より低く）ずい分変ったわね、クリスティーネ！

リンデ夫人　ええ、変ったわ。九年――十年、長い間――
ノーラ　別れてそんなになる？　そう、そうね。この八年間、幸福だったわ。それで、この町へやって来たのね。冬だというのにはるばる。大したものね。
リンデ夫人　今朝蒸気船で着いたところよ。
ノーラ　クリスマスを楽しむためでしょ、勿論。嬉しい、うんと楽しみましょうよ。そうそう、オーバーを脱いで。寒くないわね？　（彼女を助ける）ほうら。さあ、暖炉の側に坐るといい気持よ。いいえ、そこの肘かけ椅子！　あたしはこの揺椅子に坐る。（彼女の手をとる）ええ、やっと昔通りの顔に戻ったわ。最初見たときは――。でも、前より少し顔色が青くなったみたい、クリスティーネ――それに心持痩せたかな。
リンデ夫人　それから、とても、とても老けたわ、ノーラ。
ノーラ　ええ、ちょっと老けたかしら。ほんのちょっと。とてもなんてことないわ。（突然やめて、真面目になり）まあ、あたしったら、ひとのことも考えないで、おしゃべりばかりしてー　クリスティーネ、許してね。
リンデ夫人　どうしたの、ノーラ？
ノーラ　（低く）かわいそうなクリスティーネ、あなた、未亡人になったんでしょう。
リンデ夫人　ええ、三年前。
ノーラ　あたし知ってたの。新聞で読んだから。ああ、クリスティーネ、何度もお手紙しようと思ったのよ、ほんとよ。でも、いつも延ばしちゃった、いつも何か都合が悪くなって。
リンデ夫人　ノーラ、いいのよ。
ノーラ　いいえ、あたし、不人情だわ。かわいそうに、あなた、いろんな目に合って来たんでしょうねえ。御主人は何の遺産も残さなかったの？
リンデ夫人　ええ。
ノーラ　お子さんは？
リンデ夫人　ないわ。
ノーラ　じゃあ、全くなにもなし？
リンデ夫人　悲しみや心配の種さえもないわ。
ノーラ　（信じられない風で彼女を見る）でも、クリスティーネ、そんなことってあるかしら？
リンデ夫人　（重く微笑み、ノーラの髪をなでる）ええ、時にはね、ノーラ。
ノーラ　全くの一人ぼっち。どんなにつらいでしょうね。あたしにはかわいい子供が三人いるわ。今、ばあやと遊びに行ってるから見せられないけど。でもあなた、全部話してくれなくちゃ――
リンデ夫人　いえ、いえ、いえ、あなたの方こそ話して。
ノーラ　いいえ、あなたから。あたし、今日は自分のことは何も言わない。あなたのことだけを考えるわ。そう、でも一つだけ言っておかなくちゃ。あなた、近頃あたし

達の身に起こった大変幸福な出来事を知ってる？

リンデ夫人　いいえ。何あに？

ノーラ　あのね、主人が信託銀行の頭取になったのー

リンデ夫人　御主人が？　まあ、何て運のいい――！

ノーラ　ええ、凄くね！　弁護士なんて生計を立てるのには不安定な職業でしょう、特に、いかがわしい仕事に手を出そうとしないときは。トルヴァルは勿論そんな気は少しもないし、それにはあたしも全く同意見なの。ああ、ほんとに嬉しいのよ、あたし達！　主人は新年から銀行へ通うことになってるの。大した給料よ、歩合いも高いの。これからは全く新しい生活を送るわ。――好き勝手な暮し方ができる。クリスティーネ、あたし浮き浮きしてるのー　だって、凄く沢山のお金があって、何んの心配もないのはいいものだもの。そうじゃない？

リンデ夫人　え、とにかく必要なだけあるのはいいことに違いないわ。

ノーラ　いいえ、必要なだけじゃなくてね、凄く凄く沢山のお金！

リンデ夫人　（微笑んで）ノーラ、ノーラ、あなた、相変らず赤ちゃんね。学校時代は大変な無駄使い屋さんだったわ。

ノーラ　（低く笑って）ええ、トルヴァルは今でもそう言うわ。（指で脅かす）でも〝ノーラ、ノーラ〟は、あなた達が思うほど馬鹿じゃないのよ。――無駄使いなんてどうしてできる？　あたしたち働かなくちゃならなかったのよ。二人とも！

リンデ夫人　あなたも？

ノーラ　ええ、大したことじゃないけど、裁縫とか、編物とか、刺繍とか、（何げなく尻すぼまりに）それからほかのこと。あたし達が結婚したとき、トルヴァルが役所をやめたのは知ってるでしょう？　彼の部では昇給の可能性が全然なかったのよ。だから、やめてからは、それまでよりもっとお金をもうけなくちゃならなかったの。最初の年は、そりゃあひどい働き様だったわ。ありったけの内職をして、わかるでしょう。朝早くから夜遅くまで。ところが、とうてい無理だったのね。死ぬか生きるかの病気になってね、お医者さまたちは、どうしても南の方へ療養に行く必要があるっておっしゃったの。

リンデ夫人　そう、それでまる一年間イタリアに滞在したわけね？

ノーラ　その通り。出発するのは簡単じゃなかったわ。イヴァールは丁度生れたばかりだし、でも勿論、発たなくちゃならなかった、ああ、素晴らしく素敵な旅行だったのよ。お陰でトルヴァルは命が助かったし。だけど途方もなく沢山のお金がかかったの、クリスティーネ。

リンデ夫人　そうでしょうね。

ノーラ　千二百ドル、つまり、四千八百クローネ。大へんなお金よ、あなた。

リンデ夫人　でも、そういう時にそれだけのお金を持っていたのは、とにかく大した幸せだわ。
ノーラ　ええ、実をいうとね、あたし達そのお金をパパからもらったの。
リンデ夫人　そうなの？　そう言えば、お父さまがなくなったのは丁度その頃だったわね。
ノーラ　そう、丁度その頃だったわ。つらかったわ、あたしはパパを看病してあげることも出来なかったんですもの。だって、ここで毎日、イヴァールが生れるのを今か今かと待ってたの。それに、重病人のトルヴァルの世話もあったし。優しい優しいパパ　それっきりもう会えなかった。本当に、結婚以来あんなつらかったことないわ、クリスティーネ。
リンデ夫人　あなたは大変なお父さま思いだったものね。でもそれでとにかくあなた達はイタリアへ旅立ったのね？
ノーラ　ええ、お金は手に入ったし、お医者さまたちにはせきたてられるものだから、それから一ヵ月後に出発したの。
リンデ夫人　で、御主人の健康は完全にもと通りになったの？
ノーラ　お魚みたいにピチピチしてる！
リンデ夫人　でも――お医者さまは？
ノーラ　どうして？
リンデ夫人　わたくしと同時にここへいらした方、お医者さまだって、女中さんが言ったように思うけど。
ノーラ　ああ、ランク先生ね。往診じゃないわ。先生はあたし達の一番親しいお友達よ。毎日少なくとも一度は見えるわ。ほんとう、トルヴァルはそれ以来一度も病気なんかしない。子供たちも健康だし、それにあたしだって。（とび上って手をたたく）ああ、なんて、なんて、クリスティーネ、幸せな生活って素晴らしいわ、奇蹟だわ。――あれ、また。あたしっていやな女ね――自分のことばかり話してる。（彼女の側近くの椅子に坐り、彼女の膝に腕を置く）ねえ、気を悪くしないで！　――ところで、あなたが御主人を愛してなかったというのは本当？　じゃあ、どうして結婚なんかしたの？
リンデ夫人　母がまだ生きていたわ。床についたきり望みもない病人だったわ。それに弟二人の面倒も見なくちゃならなかった。あの人の申し出を断わるわけにはいかなかったと思うの。
ノーラ　ええ、ええ、言う通りだわ。御主人はその頃、お金持だったんでしょう？
リンデ夫人　かなり裕福だったと思うわ。でも確実な仕事じゃなかったから、あの人が死んだとき、事業がみんな駄目になってね、何一つ後に残らなかったの。
ノーラ　それで――？
リンデ夫人　ええ、それでわたくし、ちょっとした商売と

か、小さな学校の経営とか、出来ることはなんでもやってみたわ。この三年間は、丁度休み時間のない長い長い仕事日のようなものだった。でも今はそれも終ったの、ノーラ。かわいそうに、母はもうあの世へ行ってしまってわたくしを必要としないし、弟達も職をもって一人立ちするようになったわ。

ノーラ　どんなに楽でしょうね――

リンデ夫人　いいえ、ノーラ。いいようもなく虚な気持だわ。生き甲斐のない。（落着かなく立ち上る）だからわたくし、あの小さな田舎町にあれ以上とどまっていたくなかったの。ここへ来ればきっと、気持をまぎらわしたり、心から打ち込めるような仕事も見つけられると思ったの。ずっと簡単に。運よくそういった仕事を持てたらいいんだけど、事務仕事やなんかで――

ノーラ　でもねえ、クリスティーネ、大変よ。あなたは、今でさえ、とても疲れてるみたいだわ。保養地にでも行ったほうが遙かにあなたのためでしょうに。

リンデ夫人　（窓のほうへ行き）わたくしには、旅行費をくれるパパはいないわ、ノーラ。

ノーラ　（立ち上る）まあ、ごめんなさい。

リンデ夫人　（彼女のほうへ来て）ノーラ、わたくしこそごめんなさいね。わたくしみたいになると、心がひねくれてしまうの。一番いけないことなんだけど。でもね、働いてあげる相手もいないし、そのくせどこに居ても自分のためになるようになるようにって考えなくちゃならないし。生きるために利己的になっちゃうの。わたくしね、こんなこと信じられる？　あなたの生活が幸福になったと聞いたとき、あなたのためより、むしろ自分のために喜んだのよ。

ノーラ　どうして？　ああ、そうか。トルヴァルがあなたに仕事を見つけられるかもしれないってことね。

リンデ夫人　ええ、そう思ったの。

ノーラ　その通りだわ、クリスティーネ。あたしにまかせておいて。うまく切り出すわ、とってもうまく――まず彼の気を引くようなことを言って、ほんとに親身にならせる。ああ、あたし、あなたの役に立てたらほんとに嬉しいわ。

リンデ夫人　ノーラ、親切ねえあなた。そんなに真剣になってくれて。あなたは生活の苦労をあまり知らないんだから、二倍にも親切だと言っていいわ。

ノーラ　あたしが――？　苦労を知らないって――？

リンデ夫人　（微笑んで）だって、ちょっとした裁縫とかなんとか――あなたは赤ちゃんよ、ノーラ。

ノーラ　（ふんと首を投げて、部屋を歩く）そんなに人を軽蔑するもんじゃないわ。

リンデ夫人　ええ？

ノーラ　あなたもみんなと同じね。あたしなんか何んの役にも立たないと思ってる――

リンデ夫人　まあ、まあ――
ノーラ　――あたしなんか、つらいことばかりの世の中に生きているくせに、何んにもやったことがないと思ってる。
リンデ夫人　ノーラ、あなたたった今、つらかった仕事のことを話してくれたわ。
ノーラ　ふん――ちっちゃなことだけね！　（低く）まだ重大なことを話してないわ。
リンデ夫人　重大なこと？　何なの？
ノーラ　あなた、ずいぶんあたしを見くびっているわね。でも、やめて。あなたは、お母さまのために長い間苦労して働いて来たのを自慢に思っているでしょう。
リンデ夫人　わたくしは誰れのことも、ちっとも見くびってなんかいないわ。でもこれは事実。わたくしが母の生涯の最後の時期を楽にしてあげたんだと思うと、誇りを感じるし、とても嬉しい気持になるわ。
ノーラ　それからあなたは弟さん達にしてあげたことも自慢に思っている。
リンデ夫人　そう思う資格はわたくしにない？
ノーラ　あるわ。でも言うけどね、クリスティーネ、あたしだって自慢に思うことがあるのよ。
リンデ夫人　それは疑わないわ。でもどういうこと？
ノーラ　もっと小さく。トルヴァルに聞えないように！　どんなことがあっても聞かれちゃいけないの――。誰れにも教えちゃ駄目よ、クリスティーネ、あなただけよ。
リンデ夫人　で、何なの？
ノーラ　こっちへ来て。（彼女を自分の側のソファに坐らせる）あのね――あたしだって、自慢に思うことがあるのよ。実を言うと、トルヴァルの命を救ったのはあたしなの。
リンデ夫人　救った――？　どうして救ったの？
ノーラ　イタリアへ旅行したと言ったでしょう、イタリアへ行かなかったら、トルヴァルの命はなくなったかもしれない――
リンデ夫人　そう、費用はお父さまから――
ノーラ　（微笑む）ええ、みんなそう思ってる。トルヴァルも。でも――
リンデ夫人　でも――？
ノーラ　パパからは一文ももらわなかった。あたしが自分でお金を作ったの。
リンデ夫人　あなたが？　そんな大金を？
ノーラ　千二百ドル。四千八百クローネ。どう？
リンデ夫人　ええ、だけど、ノーラ。どうして？　宝くじでも当てたの？
ノーラ　（軽蔑して）宝くじ？　（鼻を鳴らす）馬鹿な！
リンデ夫人　じゃ、どうやって手に入れたの？
ノーラ　（ハミングしながら秘密めかして微笑む）ふん、トラ、ラ、ラ、ラ！

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com